

五 異常と災害

(徳島県災異史参照)

年 月 日

事

象

元文五年	大凶作	むしろまで食う(木頭村史)
安永四年	大水	長雨にて
寛政元年	大地震	
天保三年	大かんばつ	山で火をたき雨乞いをなす。
〃 七年	大凶作	霖雨と洪水による米一升にて七十日(木頭村史)
〃 九年	飢 饉	米一升三〇〇匁
嘉永七年	大地震	母に背負われて病氣見舞に行く途中地震あり山の木の枝で頭をなでられた(吉田快蔵談)
安政七年	大水	相生村史)
慶応二年	大洪水	富岡土手切れる。
明治三年	大水	
〃 二七年	大かんばつ	田植え半分
〃 二九年	霖雨暖冬	十二日間雨降りとおす。
〃 三二年	黄 塵	赤く見えまことに朝夕はなはだし。
〃 〃	那賀川大水	木材多量流失
〃 〃	大 雪	
〃 〃	ウソカ大発生	低温多雨
大正元年	大台風	二日間で七三三ミリ(五野)
〃 七年	大洪水	
〃 八年	〃	
〃 一二年	高温(三六、五度)	少雨大かんばつ。
昭和四年	黄砂	一日続く。

第一章 概 説

然 自 第一編

- 昭和八年八月二十七日 落 雷 延野村牛輪一名死亡
- “ 九年九月二一日 室戸台風 瞬間風速三六、七m 家屋、屋根、森林被害甚大
- “ 一五年七月 大かんばつ 水田に茶びん水等行なう
- “ 一九年二月七日 東海大地震 震央熊野灘、山くずれ停電
- “ 二一年二月二一日 南海道大地震四時十九分潮岬南方五〇軒震源にて最大震度四で中部より九州にかけて死者一、三六二
・全潰家屋一一、五〇六、余震も多く、室戸地方は隆起しその他は沈降する。山から石がころげ炭
の天井はこわれ山火事等も起った。屋根瓦は落ち土蔵の壁は落ちまたは傾き電線も切断された。
- “ 二四年八月二六、二八日 ジュース台風、九州南部に上陸して雨量六〇〇ミリをこえる。
- “ 二五年九月三日 ジェーン台風、Bクラスの台風、中心日和佐より橋をとり家屋の被害等多し。
- “ 二六年一〇月一四日 ルース台風、鹿児島から広島を通過したが風雨はなはだ強し。
- “ 二八年九月二五日 十三号台風、山林被害多し室戸台風につぐ。
- “ 三〇年七月二七日 平谷付近を震央とする震度五の強い地震あり、家屋等被害あり宮浜では死者一名、負傷者五名を出した。
- 伊勢湾台風
- “ 三四年五月二六日 チリ地震、津波、橋町四m・床上浸水一〇〇〇戸
- “ 三五年五月二四日 十六号台風雨量多く築ノ上橋流失
- “ 三五年八月二九日 第二室戸台風、中心が日和佐上陸―小松島―淡路へ通過、気圧九三五・二ミリバール・風速最大二
- “ 三六年九月一六日 七、五m 家屋山林の被害大
- “ 四三年二月十五日 大雪、平地部で三〇cm 山地部で五〇cm 植林被害甚大
- “ 四三年六月一九日 午後二時頃大きな雹が延野、吉野、雄に降り、煙草、みかん等農産物被害甚大であった。

第八章 災 害

第一節 自然の災害

一 概 説

近代科学のもたらす物質文明が、月の世界探検をも実現するほどに、驚異的發展を遂げた今日でも、地震、雷、台風等ばかり知ることの出来ない物凄いエネルギーを秘めた自然の猛威を制御することはできない。

しかしながら、人々はともすれば、科学万能の錯覚におち入り、自然の脅威に鈍感になる。そして、昔も今も、災害は忘れた頃にやってきて、痛烈に人々を打ちのめす。

それにしても、科学的知見や技術が、未だ極めて幼稚であった時代にこの郷土に生きた祖先達にとって、自然の脅威は余りにも大きく、自然との戦いは余りにも困難であったに違いない。

彼等は、その貧弱な生産力と蓄積の多くの部分を、年々歳々、突如として襲う自然の災害によって滅殺され、略奪されねばならなかった。貴重な生命が奪われる痛ましい悲劇も数限りなく繰り返されてきたのである。そうした災害の歴史を年代記の様式を借りて追跡してみよう。

二 自然の災害の記録

1 藩 政 時 代

延宝二年(一七二四)那賀郡飢饉、米価は二倍に暴騰した。

延宝八年(一七六〇)飢饉、窮民餓死する者が多数出た。

元禄二年(一六六五)勝浦川洪水。

宝永四年(一七二七)大地震。

享保九(一七三六)大旱魃、いなごの害がひどかった。

享保十七年(一七四二)大飢饉、いなごの害がひどかった。

安永三年(一七八四)大風雨がかった。

天明二(一七九一)大飢饉がかった。

天明年間は飢饉が多く、天明九年の末に寛政と改元になった時「テンメイ(天明と天命)は食うや食わずで八、九年、もうこれからはクワンセイ(寛政と食わんせ)なり」という落首が流行した。窮民の溜息にも似た諦めと為政者への微かな抵抗のざれうたである。

天保七(一八三六)大飢饉がかった。

この飢饉の原因は今日、昆虫学上、主として、ツマグロヨコバエの大量発生にあるとされているが、当時は「何も知らない百姓連は、田畑の上毛が皆無となって、貧民共は石三百目の米価に一大打撃を受けて、木の実や根までも掘り採り食うた悲惨をきたした」という。

天保十三年(一八四〇)洪水、木頭村出原旧道筋、瑞伝寺の石段まで増水した。

弘化四年(一八四三)大風雨、洪水。

嘉永二年(一八二五)大風雨、洪水。「嘉永二年の酉の水は前代未聞の大水であったというので国内一般に阿房水と評判」になった。

判」になった。

安政元年(一八五四)大地震。

相生村では、内山の吉田快藏の伝聞として「山へ木を拾いに行っておった女子供は揺られて地上に倒れ叫ぶもあれば、猪垣が崩壊して、その石が四方へ転げるのもあった。山腹の田などは破れてさがること数十か所以上百か所もあ

り三日三晩ゆりつづいた」と伝えられており、大地震であったことが伺える。

慶応二年（一八六六）那賀川大洪水。

世に寅の水と呼ばれ、一〇日余りも大雨が降り続き、川や谷々は前代末間の大出水となった。死人等はなかったが、西納で一軒砂入りとなって埋った。榎谷では被害の為に、田畑の検分を受けて、一時の畝下（貢租の免除）を受けた所もあれば、数年の畝下を受けた所もあった。

2 明治時代

明治十七年（一八八四）八月五日、風水冷害による凶作。那賀郡で餓死に瀕する者千二百二十六人にのぼる。租税の滞納が多かった。

明治二十五年（一九〇二）七月二十五日、暴風雨、洪水、荒磯山が大崩潰した。（雄、朴野等部落史参照）

3 大正時代

大正元年（一九一〇）洪水、朴野で雨量三〇二ミリに達した。（日野谷村役場敷地内に雨量計、百葉箱が置かれていた）

大正三年（一九一四）降灰、一月三日、桜島の大噴火による灰が遠く海を越えて村々にも降った。

大正七年（一九一八）大洪水、白穂になった田が多かった。初めて外米が村々に入った。

大正九年（一九二〇）大雨、台風。

大正十二年（一九二三）九月一日関東大震災、徳島市での震度四。

4 昭和時代

昭和六年九月二十六日、台風、洪水、朴野で降雨量三二〇ミリに達した。

昭和七年八月十二日、台風。

昭和八年八月、雷雨、延野村で一名雷死した。

昭和九年五月十三日、濃霧、降雹、柑橘、麦等に被害があった。

昭和九年九月二十一日、室戸台風、那賀郡各地に相当の被害があった。

昭和十年八月二十六日、台風、日雨量、朴野で二八〇ミリに達した。

昭和十一年一月四日、低温、那賀、勝浦で柑橘の被害が多かった。

昭和二十年十月、大雨。

昭和二十一年十二月二十一日、南海大地震那賀郡の被害、死者六名、

負傷者二七名、流失家屋二五戸、全壊家屋四七戸

昭和二十三年、落雷、牛輪で泉伝要助が大怪我をした。

昭和二十四年八月十八日、台風、日野谷で二七〇ミリに達した。

昭和二十五年九月十三日、キジア台風、日野谷で月間雨量一〇二七ミリに達した。

昭和三十四年九月二十六日、伊勢湾台風。

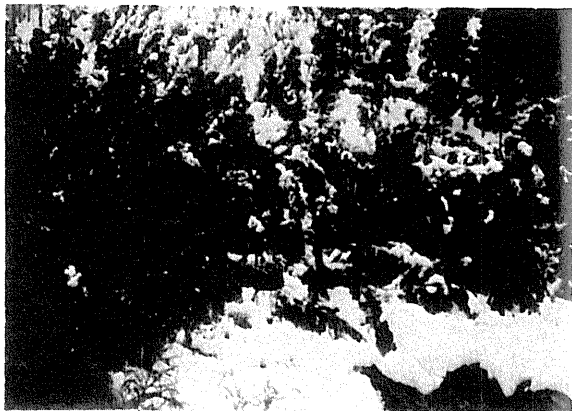
昭和三十五年八月二十九日一六号台風、築橋が未完のうちに流失した。

昭和三十六年六月、豪雨、日野谷で総雨量六九三ミリを記録した。

昭和三十六年九月十六日、第二室戸台風。

昭和四十三年二月十六日、豪雪、雪が長く樹木にこびり付いて離れなかったため、主として杉、松の幼木に、九十才の古老も知らないという大被害を受けた。

昭和四十三年六月十九日、降雹、主として延野地区の煙草、ミカン等に大被害があった。



昭和43年杉の豪雪被害状況